

きのふの空

「『いのちきのふの空のありどころ』というよき与謝蕪村むらさの俳句が好きだ。

その情景を「昨日と同じように今日も空にた風が上がつている」と読むことも出来るらしいが、ぼくにはどうもそう思えない。風が上がつていたのは昨日のことで、今日の空はからっぽだ。それを見上げながら、昨日は空のあのあたりに風があった、と思い起こしている。そんな空、つまり「マインス風」の今日の空、不在の空だ。

空というのは何も無い空間、果てのない空白。そこに雲が流れ、鳥が飛び、風が浮かび、それを見上げる自分がいて、やっとなんとか奥行きが感じられる茫洋ぼうやうとした広がりである。この句が示唆しているのは空間のことであると同時に時間のことでもある。二百数十年も前のある日に蕪村が見上げた空。そしてその前日の空。それから何万回の日々の空が過ぎ去ったことだろう。ついそんなことまで思ってしまう。

自分の中にも「きのふの空」がある。

かつてロンドンに住んでいたころ、よくハムステッド・ヒースという公園を散歩した。その南側にパーリアメント・ヒルという高台があり、頂からロンドンの街が見わたせた。そこで風を上げている人をよく見かけた。

あるとき、もう十年以上前のことだが、その丘をのぼると大きな風が目に入った。強い風をうけて堂々と中空を泳いでいた。その風には二本のしっぽがついていたのだが、それが二十メートルを下らない長さなのだ。そんな長いしっぽを初めて見た。そしてその動きに目を奪われた。まるで生きているかのようなようだった。くるくると螺旋を描いたかと思えばつぎの瞬間、山脈の稜線になり、それがまた龍のように踊りだす。ひとときとして留まらない風の描画に目が離せなくなった。こんなに美しい絵を見たことがないと思った。丘の上に突っ立ったまま、風が地面に下りてくるまで三十分以上のあいだ眺めていた。

ぼくの頭のかたすみには「きのふの空」がずっとある。そこでは、あのロンドンの風のしっぽが今も絵を描きつづけている。



1956年、東京生まれ。75年頃より広告や雑誌関係のイラストの仕事始める。79年に渡英、絵本をつくり始める。82年、イギリスの出版社 Andersen Press から、初めての本『Angry Arthur』（文 Hiawyn Oram）を出版し、翌年 Mother Goose 賞を受賞。83年からイギリスに在住。主にイギリスの出版社から絵本を出版してきた。2009年に帰国。著書に『ねむれないひつじのよる』（評論社）など。平成27年度版小学校『国語』教科書2年上巻『ミリーのすてきなぼうし』作者。